

学習者とともに作る 評価基準

— 紹介文を書く学習活動 —

佐賀県藤津郡嬉野町立嬉野中学校

とみなが たもつ
富永 保

【実践の内容】

自らの思いを言葉にして表現することに苦手意識を持った生徒に、自分なりの〈書き上げるためのルール〉を持たせたいと願った。しかし、教師が書き方を教えるといった学習指導になってしまうことは避けたかった。なぜなら、自己の感情を投影させた文章を書くためには、生徒の中に「書けるようになりたい」という強い気持ちと「書き上げるためのルール」が生み出されることが必要だからだ。

紹介文を書く学習活動を通して、生徒とともに評価基準を作る試みを行った。下書きを書く際のめあてや、交流する際の観点、振り返る際の指針となった『交流の手引き』が評価基準に当たる。学習は『交流の手引き』を作ることから始めた。生徒は、自分たちが見つけた〈書き上げるためのルール〉を教師とともに『交流の手引き』という形に整理し、自信をもって紹介文作成に取り組んでいった。

【論文内容の紹介】

1 学習者とともに作る評価基準

絶対評価の要件は、被評価者が「何によって（規準）」「どのように（方法）」「何を（目的）」評価されるかわかっていることである。これは、指導者の側からの要件である。

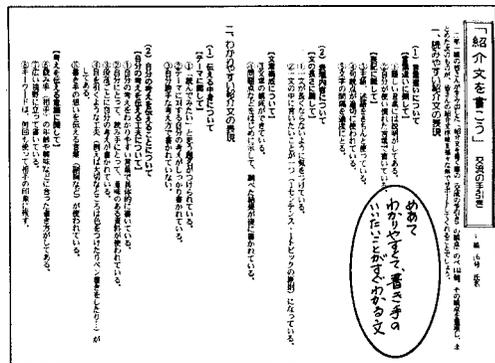
自分が「何を求め（目的）」「どのような手順で（方法）」学習を行ったとき、「どのような成果が期待できるか（成果）」そのためには、「何が充たされていなければならないか（規準）」がわかっていることも重要な要件である。これは、学習者の側からの要件である。

これからの学習指導においては、双方を兼ね備えておく必要がある。そのための方法の一つとして、「学習者とともに作る評価規準」を指向したい。

2 学習者とともに作る評価規準

— 紹介文を書く学習活動 — の実際

- a. 書くための心構えをつくる：何をどのように書くか、はじめにワークシートを用いて構想を立てさせた。このワークシートには、実際に書く前の、いわば書くことに対する期待が綴られる。
- b. 書く上でのルールを持たせる：ワークシート中の「どんなことに留意して書くか」の欄には、『交流の手引き』（下に示す）の観点を参考に〈書き方〉に関するめあてを述べさせた（○で囲んだ部分）。



- c. 互いの構想を読み合わせ、視野を広げる：でき上がった構想は、級友同士で読み合わせ、気づきや参考になった相手のよさを付箋紙に書かせて届けさせた。

- d. 構想をもとに下書きを書く：構想をもとに、生徒は下書きを始めた。いったん書き上げた下書きは級友同士で読み合わせられ、感想やアドバイスが届けられた。「語りかけの部分がよかったのでよかったですと思います」(S.U)「資料がくわしくていいけど、もうちょっと自分の思ったこと『～でよかった』とか『私は～だと思ふ』とか入れた方が読みやすくなると思うよ」(H.M)「史料館の中の様子を入れたり、一年生に紹介するものだから文を

『～だ。』とかで終わらせず、『～です』みたいに親しみを込めればいいと思うよ」(A.F)といったように、『交流の手引き』に示された観点が役に立っている。

e. 級友からのアドバイスを参考に清書する：級友からのアドバイスを参考に〈自分の言葉の使い方〉や表現方法を見直し、清書する。

f. 作品を1年生に読んでもらい、コメントをもらう：でき上がった作品は、教師が1年生に届けた。〈自分の言葉の使い方〉を見つめる場を学級外にも求めたのである。1年生は、先輩が書いた「長崎自主研修」の紹介文を興味深く読み、コメントを送った。

g. 自分の足跡を振り返る：一連の学習を終えた生徒は、自分の学びの足跡を振り返る。級友から届けられたアドバイスが自分の表現や〈言葉の使い方〉を見直させてくれた。1年生から届けられたコメントが自分の学びの足跡を客観的に見つめる場を提供させてくれた。

h. 学習の成果を保護者に届け、評価してもらう：この紹介文は、1年生だけでなく、保護者にも読んでもらった。我が子の学習の様子を知ってもらいたかったし、保護者にも我が子の成長のためにひと言のコメントをほしかったからである。「普通、文章を書くときは、ついつい一方的に読み手に自分の考えを押しつけがちだけど、今回の国語の授業では『自分の文章』を客観的に見ることができ、多角的な考えがあることを発見できてよかったですね。また、ひとつの作品に対して推敲を重ねて、「自分の言葉で表現する力」が身についたように感じました。成長の過程が見てとれました」(保護者)といったコメントが寄せられた。

このように保護者が「学習過程」と「学習の成果」についてきちんと理解した上で、我が子へ適切かつ具体的なコメントを届けている。保護者への『説明責任(アカウントビリティ)』は、教師から一方的な説明がなされるだけであってはならない。学習者と保護者

と教師との三者の間に「伝え合い」の場が成立しなければならないのである。

i. 自分自身に宛てた手紙を書く：これまでの学習活動を振り返って学習者は自己評価を行った。ここで教師が工夫したことは、単に学習の足跡を振り返り、〈自分の言葉の使い方〉を見つめさせるだけでなく、今後の自分の言語生活を見通し、期待を持たせるよう、『自分自身に宛てた手紙』を書かせたことである。

【3年生になった自分への手紙】

今回の学習では、言葉の使い方や表現内容、自分の考えを伝える工夫などを勉強しました。

◎読み手のことを考える

- ・読み手の興味をひく言葉が書かれている
 - ・書き手の感情を表す言葉が書かれている
- これらができるようにになりました。

3年生では、

- ・「読んでみたい」と思う題名がつけられている
 - ・段落ごとに自分の考えが書かれている
- これができるようになってください。

3 今後の課題

(1) 一覧表の形式をもった「評価表」

今回は、生徒の書いたものを分析した。この方法だと、一人一人の生徒に密着はできるが、時間と労力の上で問題がある。また、個の風景は見ることもできて、全体の風景を見渡すには、やはり一覧表の形式をもった「評価表」も欠かせないであろう。

(2) 言語事項の取り扱い

今回の実践では〈言葉の使い方〉に直接影響を与える言語事項の取り扱いが不十分であった。生徒の目は、表現方法や内容に向いており、一つ一つの〈言葉の使い方〉には十分には向けられていなかった。